



祭神 遠藤七郎左衛門宗寿
遠藤七郎左衛門国忠
遠藤七郎昭忠
(葛塚の庄屋 遠藤家の3人)

祭礼 10月9～10日

開市神社には、葛塚の人々と深いかわりがある、葛塚の庄屋 遠藤家の3人が祭神として祭られています。

始まりは、1863(文久3)年に遠藤七郎左衛門宗寿を、葛塚の稲荷神社・石動神社の境内にそれぞれ祭ったことです。稲荷神社には、葛塚の町の人々が、葛塚市を開くことに尽力した開市の神として祭りました。また、石動神社には、農家の人々が、用水の確保に尽くした用水の神として宗寿を祭りました。

翌年、葛塚分裂騒動を解決し(56ページ参照)、庄屋として力を尽くした七郎左衛門国忠も、合祀されました。

1871(明治4)年、田畑を埋め立て常盤町が開設しました。開設の記念として、稲荷神社と石動神社の境内にあるこれらの祠を合祀して、開市神社が常盤町に建立されました。

さらに、1928(昭和3)年、幕末に北

辰隊の隊長として活躍した七郎昭忠が、勤皇の功勞により、従五位を追贈されました。町の人々は、そのことを記念して昭忠も合祀しました(61・81ページ参照)。

神社は、1969(昭和44)年、常盤町から稲荷神社境内に移転しました。1871(明治4)年に建築された社殿も移築されました。この社殿は、建築当時の姿がよく残されているため、2008(平成20)年に、国の登録有形文化財に認定されました。

祭礼は、葛塚市開設の許可が下りた1761(宝暦11)年旧暦10月8日にちなんで、かつては11月8日に行われていました。しかし現在は10月9～10日に行われています。

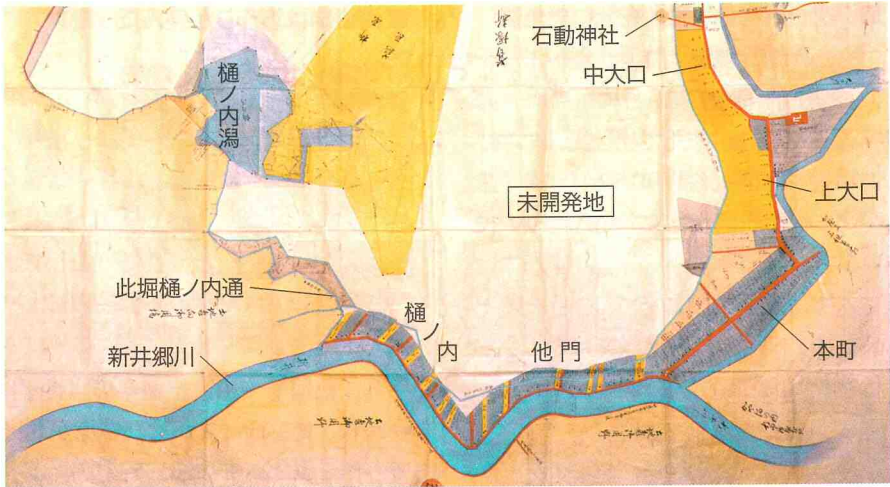
境内には七郎昭忠の顕彰碑や、その弟の遠藤八郎を祭った「遠藤興国霊神」の石碑もあります。



「遠藤興国霊神」の碑
八郎が教授した寺子屋の教え子たちによって、
1900(明治33)年に建立されたと伝えられています。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

250年前から町並みが作られていた！ 江戸時代の「葛塚」



1733 (享保18) 年の下興野新田絵図 (市指定文化財) より

■ どこが描かれているのでしょうか？

現在も変わらず残っている道路 (赤色部分) がヒントです。ここには新井郷川沿いの樋ノ内～他門～本町～上大口～中大口などが描かれています。

1731 (享保16) 年、阿賀野川の松ヶ崎堀割が決壊し、福島潟周辺に広大な干上がり地ができました。葛塚も本格的に開発が始まり、計画的なまち造りも行われました。絵図が作られた1733 (享保18) 年に、葛塚の大部分は未開発の土地 (白色部分) でした。しかし、できたばかりのまちの様子も描かれていて、当時の様子を知ることができます。

ここにまちができたのは、新井郷川を利用した舟運が盛んであったことや、となりの嘉山の河岸に新発田藩の米蔵があって、人の往来が多かったからです。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

■ 進む開発、増える人口

開発が進むと、ほかの村や町から多くの人が移住してきました。葛塚町が開かれる少し前の1756 (宝暦6) 年の葛塚は、家数228軒、人口1,028人でした。しかし、江戸時代終わり頃の1864 (元治元) 年には、家数は658軒、人口も3,000人以上に増加しました。市場が開かれたことや特産の木綿織物「葛塚縞」の生産が増え、地域経済の中心となって栄えたことが理由です。

明治時代以後も、蒸気船の運航や白新線開通などで葛塚の人口は増加していきました。特に、白新線の開通にあわせて進められた開発では、豊栄駅南側に幅18mの道路や白新町が造成されました。現在も、葛塚地区は宅地化が進んでいます。